

<12月7日のミニレポート課題>

1、次のプラトンの問いに答えてください。

「人間は自分が知っているものも知らないものも、これを探求することはできない。というのは、まず、知っているものを探求するということはあるにないだろう。なぜなら、知っている以上、その人には探求の必要はないわけだから。また、知らないものを探求するということもあり得ないだろう。なぜならその場合は、何を探求すべきかということも知らないはずだから」 (プラトン『メノン』276)

ではなぜ人間は、探求できるのでしょうか？その理由を説明してください。

<学生の答えの公約数>

完全に知っているか全く知らないかの二分法だとこの問題に答えることは難しいが、この二分法が間違っているのではないか。知には段階ないし程度の違いがあり、低い段階の知のときに問いをたて、より高い段階の知に進むことがそれに答えることである。

別のケースとしては、よりよく知っている人とあまり知らない人の区別があり、よりよく知っている人が知らない人に問いを立て、それに答えようとして、あまり知らない人の知もより良いものになる（これは教育の場合）。あるいは、人によって知っている内容に違いがあり、Aを知っているがBを知らない人Xさんと、Bを知っているがAを知らない人Yさんがいるとき、互いに教え合う。

<入江の答え>

知の程度を段階に分けることに、賛成です。それでも低い段階の知のときに、高い段階の知をもとめる問いを立てることが、どうして可能になるのか、という問題を考えようとする、プラトンの問いが反復すると思います。このときに、高い段階の知を求める問いを立てるには、高い段階の知について知らないことの知「無知の知」が必要になります。どんな場合にも、問いを立てるには、求めていることについて知らないことの知「無知の知」が必要なのではないでしょうか。では、この「無知の知」はどのようにして可能になるのでしょうか。あるいは、どのような構造を持っているのでしょうか。

私の現在の答えはこうです。AさんとBさんが駐車場にやってきて、AさんがBさんに「Xさんの車はどれですか？」と問う場合を想定してください。この問いの前提は、

p 1、Aさんは、Xさんの車がその駐車場にあると知っている、と思っている。

p 2、Aさんは、<Bさんは、Xさんの車がどれであるかを知っている、あるいは知っている可能性がある>と信じていること

これに加えて次も前提できます。

p 3、Aさんは、「Xさんの車」という表現の意味を知っているが、「Xさんの車」の指示対象がどれであるか知らない。

p 4、Aさんは、＜Bさんは、「Xさんの車」という表現の意味を知っており、しかも「Xさんの車」の指示対象がどれであるかを知っている、あるいは知っている可能性がある＞と信じている。

がどれであるかを知っている、あるいは知っている可能性がある＞と信じている（このp 4は上のp 2をより詳しく言い直したものです。）

さてここで、Bさんが、ある対象を指さしながら「あの赤い車です」と答えたとしよう。Bさんは、Aさんに「Xさんの車＝あの赤い車」を伝えようとしています。

Bさんは、「あの赤い車」という表現の意味を知っているだけでなく、その指示対象を知っています。Bさんは、Aさんが「あの赤い車」の表現の意味を理解するだけでなく、その指示対象を理解するだろうと信じています。

Aさんが、「Xさんの車はどれですか？」と問うたのは、「Xさんの車」の意味を知っているが、その指示対象を知らなかったので、その指示対象を求めるために問うたのです。Bさんの答えは、その指示対象を指示する別の表現（共指示表現）を用いて、その指示対象を示すことでした。つまり、この問答が成立するには、問いに使われる表現の意味と指示対象の区別、答えに使われる共指示表現と意味と指示対象の区別が必要です。

一般に問いは、答えとして何を求めているのかを、明示する必要があります。さもなければ問われた人は、何を言えば答えになるのかが分からないからです。答えとして何を求めているかを表現するには、表現の意味と指示対象の区別が必要になります。この区別が、「無知の知」です。ソクラテスが「正義」「美」「徳」などについて知っているという人々に尋ねて、彼らもそれを知らないことに気づいたという話は、ソクラテスは、これらの語の意味を理解しているが、その指示対象を理解していないこと知っていたが、彼らその指示対象を理解していないことに気づいていなかったのです。

§ 8 真理の代文説から真理の問答代用説へ

That is true が文への照応表現であり、これの要素となることが、「真である」の唯一の機能である」と主張するのが、真理の代文説である。ところで、文への照応は、先行する文の発話への照応である。もし、その発話の理解が、少なくとも暗黙的に、相関質問との関係において成立するとすれば、代文は、先行する発話を問いへの答えとしての先行発話を照応する必要がある。つまり、発話への照応は、暗黙的先行する問答への照応である。

もしこのように言えるのであれば、真理の代文説は、真理の問答代用説として理解すべきである。ただし、慎重に吟味する必要があるので、ここでは、これ以上立ち入らない。

（前回の§ 7への補足です。次の§ 番号を9にしたかったので、付加しました。）

§ 9 自然主義からの多様な表象・記号・意味の説明

Welcome to the new world! ここから言語の外に出て、real world の話をします。(しかし、おそらく最後は、real world に出られない、real world と linguistic world を分けられないという結論になると思います。)

1、理論哲学の概観：自然主義 対 構成主義

理論哲学の主たるテーマに、真理論、存在論、知識論がある。それぞれにおいて立場の対立があるが、それらの論争は互いに関連しており、それぞれの立場には次のような親和的な結合関係があり、大きく二つの陣営に分かれる。

<自然主義>の立場

真理の対応説

対象の形而上学的实在論、あるいは科学的实在論

知識の外在主義

<構成主義>の立場

真理の整合説、あるいは真理のデフレ主義

理論的対象の構成主義 (ファンフラーセン、ローダン?)

知識の内在主義

自然主義の立場でも、表象や記号を説明する必要があるので、その説明の試みが、フォーダー、ドレツキ、ミリカンなどによって行われている。ここでは、ミリカンによる生物学的な表象の説明を紹介して、その延長上で「問い」の生物学的な説明をしようとするとうなるかを検討したい。

2 ミリカンの生物学的自然主義

ルース・ギャレット・ミリカン (Ruth Garrett Millikan, 1993-) は、イエール大学でセラーズの下で PhD を取得、チャーチランドとともにセラーズ右派と呼ばれる。Connecticut 大学教授 (彼女の HP は、<https://philosophy.uconn.edu/faculty/millikan/#>)

参考文献:

Millikan, 'Biosemantics', Journal of Philosophy, vol. 86, 1989, 「バイオセマンティクス」

前田高弘訳 (信原幸弘編 『シリーズ心の哲学 III, 翻訳編』 勁草書房、2004 年)

Millikan, Varieties of Meaning, MIT Press, 2004. ミリカン『意味と目的の世界』信原幸弘訳。(以下の引用は、この翻訳のページ数)

ミリカンは、自然主義の立場から、さらに生物学の立場から、自然的に理解された世界の中で、意味、表象、目的、自由、道徳がどのように成立するのかを説明する。

まず、そのためには、ミリカンは、「記号」「意味」について次のように説明する。

(1) 「記号」とは、「意味する」とは、何か？

「あるものが何かを意味する」といえるとき、そのものを「記号」と呼ぶ。(ただし「意味する」には、多様な用法があり、それらに共通のものは何もない (p. i) という。)

OED によれば、「意味する」は、心に抱く、意図する、表示する、という 3 つの意味をもっている。「記号」は、二つの特徴 (目的と表示) を持つ。

第一に記号は、目的をもつ。あるものが何かを意味するとは、あることに役立つということ、どんな目的をもつか、ということである。「意図する」とは目的の実現を意図することであり、記号は、目的を持つ。「目的の典型例は、明示的な人間の意図である。」(ii)このような意図は表象された目的である。

第二に、記号は、何かを表象したり表示したりする。

「表示するものの典型例は、文のような志向的記号である」(ii)

(2) 自然的記号 (natural signs) と志向的記号(intentional signs)の区別

「生物はいかにして自然的記号の生産から利益を得るのか。なぜ生物の中にあるあるシステムがその仕事のために選択されてきたのか。ここにはきわめて慎重な姿勢が求められる。我々は、ある有用な結果がその副産物としてたまたま自然的記号の生産をもたらす場合と、記号の生産そのものが有用な結果であるような場合とを区別する必要がある。」 96

おそらく次のように区別できるだろう。

自然的記号＝「ある有用な結果がその副産物としてたまたま自然的記号の生産をもたらす場合」

志向的記号＝「記号の生産そのものが有用な結果であるような場合」

<自然的記号の説明>

「例えば、身体は皮膚がこすれるところに、たこを作り出すが、そのことは非 g 附をさらなる損傷から守るという有用なけっかをもたらし、また、たこができている場所は皮膚がこすれていた場所の自然的記号となる。」 96

「しかし、たこが皮膚の擦れていた場所の自然的記号であるという事実は、それだけでは、身体にとって何の益にもならない。たこを作り出す傾向性は、皮膚が擦れていた場所を示すという結果のために選択されたのではないのである。」 96

「また、私が庭に溝を掘って、雨が降ったときに水がそこを流れるようにしたとすれば、この私の目的が成就する限り、溝は雨が降ったときに、水が流れる場所の自然的記号となろう。しかし、わたしの目的は、雨が降ったときに水が流れる場所の自然的記号を作り出すことであったわけではないのである。」 96

「さらにまた、ガンは凍るような夜の寒さに反応して南に飛び立つように自然選択によって設計されている。この設計のゆうような結果は、冬が来る直前に、ガンが南に飛び立つことである。この設計がうまく働けば、その副産物として、凍るような寒い夜はガンがまもなく

南に飛び立つことの自然的記号になるだろうし、ガンの南への飛び立ちは冬が間もなくやってくることの自然的記号となるだろう。この自然的記号は、いずれもガンに対して自然選択が働いた結果であるが、いずれの記号の生産も有用なために選択されたわけではない。」 96

「たこも、溝も、凍るような寒い夜も、ガンの南への飛び立ちも、すべて志向的記号ではないことになろう」 97

<志向的記号の説明>

「他方、母親のめんどりがえさを見つけたときにだすコッコツという特徴的な鳴き声を考えてみよう。コッコツという鳴き声は、その母親がえさを見つけたことの局地的に反復的な自然記号である。また、ひよこは、母親の鳴き声に反応してそのもとに駆けていき、エサを見つける。じっさい、鳴き声を出す母親の傾向性は、ひよこにたいしてそのような結果をもたらすがために選択されてきたのである。この鳴き声は、たまたまひよこによって利用されるたんなるえさの自然的記号ではない。それはえさの記号としてひよこに役立つように、目的をもって生産されたのである。」 97

「母親の鳴き声は、志向的記号なのである」 97

「志向的記号が目的をもって生産された自然的記号に他ならないとすれば、それはある種の解釈者にとって記号として機能するようにできていなければならない」 97

「志向的記号というのは、記号使用者による使用のために目的をもって生産される記号である。」 97f

<自然的記号に真偽はないが、志向的記号には真偽がある>

自然的記号：「黒雲は雨の自然的記号でありうるが、実際に雨が振らなければ、それは雨を意味しない。それは偽ではありえないのである。」 iii

「志向的記号は、本質的に目的を持つ。それらが偽であり得るのは、それらが目的を持ち、目的は達成されないことがつねにありうるからである。」 iii

<ミニレポート課題>

- 1、自然的記号の例を1つないし2つ挙げ、その記号の生産が有用なために選択されたわけではないことを説明しなさい。
- 2、志向的記号の例を1つないし2つあげ、その記号が目的をもって生産されたことを説明しなさい。
- 3、自然的記号と志向的記号の区別について、不明なところがあれば質問してください。この区別がうまく適用できないような事例があれば、それを挙げて、説明してください。